

# 組織的調査研究活動推進事業 (平館村)

佐藤 敦・小倉大二郎・宝田 森夫・伊藤 進<sup>(1)</sup>・浅加 信雄<sup>(2)</sup>・富永 武治

## I 調査の目的

平館村は、陸奥湾の湾口部に位置する過疎村で、古くから行なわれて来た定置網漁業に加うるに最近勃興したホタテガイの養殖地帯であるが、昭和50年以来ホタテガイの大量斃死が起り漁業生産が停滞している。その対策として生態的に調和のとれる他種の複合養殖をすすめることにより、生産の増強を図ることが可能かどうか、またこのために必要な調査研究のあり方などを検討した。

## II 調査方法

- (1) 調査期間 昭和54年4月～昭和55年3月
- (2) 調査地域 東津軽郡平館村
- (3) 調査組織 県：調整組織：漁政課長・水産課長・振興課長・水産増殖センター所長  
活動チーム：水産増殖センター・水産試験場・青森地方水産業改良普及所  
地元：協力機関：平館村役場・平館村漁業協同組合  
平館村漁業研究会（石崎漁業研究会・野田小型定置漁業研究会・平館村漁業研究会・ホタテガイ漁業振興会・平館村漁協青年部）
- (4) 会議
- (イ) 第1回調整会議 昭和54年10月1日  
活動チームの編成・活動方針の決定
- (ロ) 活動計画作成会議 昭和54年10月23日  
活動計画の作成
- (ハ) 第1回現地協議会議 昭和54年10月23日  
活動内容の説明・問題点の抽出
- (ニ) 第2回調整会議 昭和54年12月20日  
問題点に対する対応方法についての県の方針検討
- (ホ) 第2回現地協議会議 昭和55年2月8日  
県の方針説明・対応方法についての総合方針決定
- (ヘ) 東北ブロック会議 昭和55年3月10日  
上記に対する国の指導

---

(1) 青森地方水産業改良普及所

(2) 青森県水産試験場

(5) 調査方法

現地協議会を開催し、現地からの要望、技術需要、問題点を収集し、調整組織ともはかって、問題解決のための方針と今後の調査研究のすすめ方などを検討した。

Ⅲ 調査結果

(1) 活動地域の概況

平館村は、本洲の最北端、津軽半島の北端に位置する。村の地勢は南北に細長く、東西5.24km、南北17.15kmで、その間に元宇田、弥蔵釜、石崎沢、平館、根岸、野田、今津、船岡、磯山の9部落が海岸に点在している。

平館村の人口は、3,788人(昭和55年3月)で、漁業就業者は、正組合員302人、準組合員170人計522人である。また出稼者が圧倒的に多く、一時期は800人程度であったのが公共施設の建設やホタテガイの養殖などにより最近では300人前後に減少している。

(2) 活動地域の漁業の現況

平館村の漁業は古くから定置網漁業を主体に釣り、延縄漁業を中心にして2,000トンから2,800トン程度の総生産量を維持してきたが、昭和43年頃から、ホタテガイの養殖が盛んになり最盛期の昭和49年～50年にかけては4,500トンから4,800トンの生産を上げている。

ホタテガイの養殖は昭和50年度、総生産量の51.2%、2,307トン、金額にして77.1%(総額699,999千円)とピークを示したが、その後ホタテガイの大量斃死が起り、昭和53年度には総生産量の16.1%492トン、金額にして12.5%(総額699,009千円)に激減している。

魚類については、マイワシ、イカナゴ漁を中心にカレイ類、ヤリイカ、サバなどが主なもので、昭和53年度には底建網の導入により、ヒラメの漁獲量が増加し、総生産量の3.5%となり金額にして28.4%の値を示している。また最近光力利用のイカナゴ漁の不振により漁業者の生活を大きく脅かしているのが実状である。

第1表 平館村における漁業生産量の推移

(単位：t)

年 度	昭・43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53
ホタテガイ養殖	3	22	239	396	901	770	1,769	2,307	1,691	806	492
魚 類	1,606	1,448	1,343	1,892	1,384	2,306	2,712	2,048	2,895	3,440	2,328
総 生 産 量	2,310	2,018	2,159	2,730	2,889	3,366	4,695	4,506	4,861	4,475	3,063
ホタテガイ 養 殖 総生産量%	0.1	1.1	11.1	14.5	31.2	22.7	37.7	51.1	31.3	17.4	16.1

第2表 平館村における主な魚種の漁獲量の推移

(単位：t)

魚種 \ 年度	昭46	47	48	49	50	51	52	53
イカナゴ	1,082	702	1,311	1,515	812	1,151	1,151	283
マイワシ	144	40	203	340	701	1,328	1,729	1,294
カレイ	21	42	72	113	164	96	142	131
カタクチイワシ	253	103	154	83	59	71	92	22
サバ	68	133	205	369	154	59	47	92
ブリ	38	39	10	4	1	2	1	22
ヒラメ	57	27	35	25	5	18	32	107
アジ	80	20	76	130	5	12	7	14
スルメイカ	263	88	118	62	41	87	28	37
ヤリイカ	73	86	111	83	49	103	71	100

(3) 現地協議会における協力機関からの要望事項

A 魚 類

1. 漁 業

- (1) イカナゴ漁の不振の原因を調査して欲しい。
- (2) 組合でサケのふ化放流をやってみたいと思うがどうか。

2. 養 殖 業

- (1) 54年の春、タイの稚魚がたくさん獲れ、今後この養殖に力を入れたいがどうか。
- (2) ハマチの養殖に力を入れたいがどうか。
- (3) ハマチの裏作としてギンザケの養殖を考えているがどうか。
- (4) ヒラメの養殖に力を入れたいがどうか。

B 貝 類

- (1) ホタテガイの大量斃死問題が解決していない。収容密度、分散など養殖方法を知りたい。
- (2) 当地には砂浜があるが、ホッキガイの増殖はどうか。
- (3) アワビの籠養殖を行ないたいが、県栽培漁業センター(仮称)からの種苗の入手は可能か。

### C 甲殻類

- (1) 増殖センターでクルマエビの人工採苗を行なっているとのことだが、陸奥湾の対象種になり得るのか。

### D 棘皮類

- (1) 現在、数人の漁業者がウニの籠養殖を行なっているが、今後人数が増える可能性があり、天然のウニが不足する傾向にあるので、増殖センターで人工採苗出来ないか。

### E 原索類

- (1) ホヤの養殖をやって見たいが、陸奥湾でホヤの天然採苗は出来ないか。

### F 藻類

- (1) 促成のコンブの毛（ハイドロゾア）をつけない養殖法またはとる方法はないか。
- (2) 当地には天然のマツモがある。岩手で養殖をやっているようだが、当地でも養殖できないか。
- (3) モヅクの採苗と養殖は出来ないか。
- (4) 石崎地区の岩礁地帯でフノリの大量生産方法を検討して貰いたい。

## (4) 前記要望に対する対応方針

### <総論>

平館村の昭和53年度の漁業生産量は約3,000トンで、昭和52年度の4,400トンと比較すると実に33%の減少となっている。この主な原因としてホタテガイ養殖の不振と昭和53年度から急に少なくなったイカナゴ漁の不漁によるものと考えられる。

陸奥湾におけるホタテガイ養殖は、大量への死による打撃から徐々に回復の方向に向っているが、平館の場合には依然として下降線をたどっているのが実状である。

平館村においては、ホタテガイの養殖に全面的に代り得るような増養殖適種を見出すことは困難で、この地域ではホタテガイの養殖を推進するのが最も適当で、先ず何をにおいても殺さないホタテガイ養殖技術を確立すべきであろうと思われる。これについてはすでに明らかにされたホタテガイ養殖技術を研修会や、場合によっては現地における実証試験などを通じて全漁民に徹底を図るべきものと考えられる。ホタテガイの他に若干の複合養殖の可能性がありそうなものが考えられるが、採算性、流通等の問題などがあり、これについては今後関係機関と情報交換を行なうと共に必要なものについては試験研究を行ない徐々に採択の可否を検討すべきものと考えられる。

### <各論>

- (1) イカナゴ漁の不振の原因については、光力による操業、許可船が増えていることによる獲りすぎや海況の問題などいろいろのからみの中で不漁になっていると思われる。調査については担当である水試の対応が望まれる。
- (2) 魚類養殖に関しては、①販路・魚価の問題、②種苗確保の問題、③魚病の問題、④漁場汚染の問題などいろいろな問題が考えられる。なおホタテガイを重視する陸奥湾では、特に漁場汚染につながる魚類養殖は原則としてひかえるべきであり、かりに行なう場合でも問題があれば直ちに中止出来る体制をとるべきである。魚類養殖についての適正養殖規模などは増殖センターで是非検討しなければならない問題と考えられる。
- (3) ホッキガイについては過去に青森地先などで放流例があるが、暖流の影響がある陸奥湾ではよい結果が得られておらず対象とする余地はなさそうである。

- (4) アワビ、ウニの籠養殖については、今後増殖センターで技術的な評価を検討する必要があるだろう。ウニの人工採苗については、当分天然の空ウニを利用することで対応出来そうなので急ぎ試験に着手する必要はないものと考えられる。
- (5) 現在増殖センターで行なっているクルマエビの人工採苗試験は、日本海放流用として考えているものであり、冬期の水温が低い陸奥湾においては種苗放流による資源涵養の可能性は極めて低いものと考えられる。
- (6) マボヤの効率的な採苗は、本県では困難で宮城県より種苗を購入した方が有利であろう。
- (7) 促成コンブ養殖でハイドロゾアの付着防除の問題は、過去に増殖センターでいろいろ試験を行なったが難しい問題である。今後とも増殖センターで検討してみる必要がある。なお現在除去機械が市販されているので、その活用も考えられる。
- (8) マツモについて当地は暖流の影響があるのでどの程度成育するか疑問である。
- (9) モヅクの採苗は2～3の試験例はあるが、未だ充分な養殖の成功例は少ない。他県の例など調査の上結論を出すことが望まれる。